

■九州朝日放送番組審議会議事概要（9月分）

第596回	九州朝日放送番組審議会 議事概要
開催年月日	平成29年9月19日（火） 午後4時00分～5時40分
開催場所	九州朝日放送 本社役員会議室
出席者	<p>委員総数 8名 出席委員数 8名</p> <p>（出席委員） 宮田 克彦委員長、古宮 洋二副委員長 野田 幸之輔委員、池田 勝委員 安恒 万記委員、井手 雅春委員 鶴 利絵委員、三好 京子委員</p> <p>（放送事業者側出席者名） 代表取締役社長 和氣 靖 常務取締役 二木 清彦 取締役編成制作局長 清水 透 報道局長 白井 賢一郎 ラジオ局長 園田 哲也 編成制作局テレビ編成部 部長 坂井 剛</p> <p>視聴者・広報室長兼審議事務局 奥園 徹 事務局 竹下 優（テレビ編成部）、松永 俊郎（視聴者・広報室）</p>
議題	<p>・2017年系列審議委員代表者会議 議題 「テレビは何故つまらなくなったのか ～メディアとしての存在価値を問い直す～」 について</p> <p>1. 平成29年9・10月 ラジオ・テレビ番組編成状況 2. 平成29年7・8月 視聴者・聴取者応答状況の報告 3. 次回平成29年10月度（第597回）審議会日程 10月11日（水）午後4時00分～開催 <課題> テレビ番組 「第21回KBC水と緑のキャンペーン 水と緑の物語 ～守りたいモノ つなぐコト～ あの時私は 九州豪雨一か月」について 放送日： 8月5日（土） 昼0時 ～ 0時50分</p> <p>4. その他</p>
議事の概要	<p>◎委員の意見（概要）</p> <p>委員からは、</p> <ul style="list-style-type: none"> ○テレビは本当につまらなくなったのだろうか？テレビが娯楽の主流だった時代から、経済は発展し生活スタイルが多様化、価値観も多種多様となり、千差万別な媒体が登場した。その結果、個々の興味や視聴時間が分散し、視聴率という側面からだけ見るとテレビ離れを象徴するような評価があるのかもしれない。それでも多くの人にリアルタイムで情報を提供できる媒体としてテレビに代わるものはまだないと思う。つまらなくなったというのは、価値観が多様化して「全員」が面白いと評価してくれなくなったからではないか。過去の「テレビ」というメディアの栄光を忘れられない人たちの評価ではないか。 ○つまらない番組もあるが、非常に面白いものもある。ドラマ系ではちゃんと作りこまれ、コストがかけられたものは見るに値する。KBCでも「アサデス。」や「タビ好き」のように地域に向き合ってちゃんと手をかけて制作された番組は存在感もあり、まだまだ地方局の可能性があると感じる。。 ○テレビは、ニュース等情報提供の媒体としてほかのメディアにはない価値を有しており、何か掘り下げて説明するメディアとしても最適、また地域を紹介することで地域の活性化を図るなど社会を動かす力も持っている、これがテレビのメディアとしての存在価値ではないか。 ○夕方の番組ではグルメやお出かけ情報など似た内容が同時時間帯に放送されている。バラエティー番組では各局とも人気のあるタレントを起用する傾向があり、このような同質的な動きがコンテンツの消費を早め、結果としてテレビをつまらなく感じさせているのではないか。同じような番組が続いていると視聴者は飽きる→面白くない→つまらない、と変化していく。 ○つまらなくなったのは、視聴率至上主義の一つの影響ではないか。民放テレビ局は視聴率にこだわらざるを得ず、奇抜な発想やユニークな挑戦は難しいのだろうが、もっと制作者自身が面白と思うことを追及することも大事なのではなからうか？安いコストで高い視聴率の番組を作ると結果として似たような番組になるのかもしれない。オリジナルを作るには手間も制作コストもかかるとは思いますが、各局が独創性を競うような番組を作って欲しい。 ○昔の番組では「今日は何があるのだろうか？」というドキドキ感があつたし、トークも過激だったが、今は無難でクレームが発生しない番組が優先され、面白く感じる番組が減っているのではないか。視聴者からの苦情などに加えて、今は番組が録画され、ネット上では動画が瞬く間に拡散する。もし問題があれば一気に入らしてしまふような状態で、危機管理的要素を重視せざるを得ない番組作りが閉塞感を感じているのではないか。 ○蔓延する情報をフェイクなのかファクトなのか見分けるのがメディアに身を置く人間の第一の資格であったはずだが、最近ではインターネットの情報をそのまま信用して流し、それが誤りで大問題にあるケースが相次ぎ危機感を覚えている。 などの批評や提言を頂きました。 <p>これらに対して、担当者から、</p> <ul style="list-style-type: none"> ○なぜ、このテーマを話し合わなければならないのかと言うと、一つは番組の質そのものが劣化してやいなやという問題と、環境面で今やいろいろなメディアが乱立する中で、相対的に視聴率が下がっているという事実があり、視聴率が下がっているのはテレビがつまらなくなったからなのかどうかという観点からだと思う。 ○インターネットの情報はどこか信用がならない。地上波としての存在価値をいかにして保っていくかというのは、ジャーナリズム性ではないかと思う。様々な情報を客観性を保ち提示することにより、いかにしてテレビ局と視聴者との間にある信頼性を強めていくかが大事。 ○報道の信用性をどう担保していくか、地上波でのテレビ報道の信用性、重要性をきっちりと示し、併せてインターネットと連動し、関係性を高めていくことが重要だと思う。 ○地方局もキー局も制作量が増加傾向の中で、同じような番組が散見されるが、時代感覚をちゃんとつかめているか、困った時に頼りにされる放送局なのかが大切ではなからうか。 ○回顧からは何も生まれない。これから何ができるのか。ローカルがどうあるべきか？シニアにどう向き合うのか？スマホが「いつでもどこでも」ならテレビは「今だけここだけ」のものをどう扱うのかなど根源的に問うべき時期と思う。系列の中で最も自社制作比率の高いKBCとして何ができるのか真摯に考えていきたい。 <p>などの説明をしました。</p>